

『#宝島』（真藤順丈著）を読んでみた。著者は4つの新人賞を相次いで受賞しデビューした。受賞したのは『地図男』、『庵堂三兄弟の聖職』、『東京ヴァンパイア・ファイナンス』、『RANK』。本作で直木賞を受賞。

沖縄の歴史や米軍基地問題、そして若者たちの葛藤と成長を描いた、青春群像劇であり、冒険物語でもある。戦後の沖縄を舞台（1952年から1972年の20年間に、米軍基地から物資を奪い住民に分け与える「戦果アギヤー」として活躍した若者たちの青春と、彼らが目指した「英雄」の姿を3部に分けて描いた物語である。特に、リーダー格のオンが基地から持ち出した“何か”という謎が20年後に明かされる。1972年は私が医学部に入学して年であり、その直前には赤軍派のあさま山荘事件が起こり、国民をテレビの前に釘付けにした。

第一部は、1952年の沖縄が米国統治下にあった時代から始まる。幼馴染のグスク、ヤマコ、レイは、オンをリーダーとする「戦果アギヤー」として、米軍基地から物資を奪い、人々に分け与えていた。彼らは、いつか「でっかい戦果」を上げ、英雄になることを夢見ていた。しかし、ある夜の襲撃でオンが「予定外の戦果」を手に入れた後、突然姿を消してしまう。

第2、3部では、残された3人のその後が描かれる。グスクは刑事、ヤマコは教師、レイはアウトサイザーとなり、オンの影を追いながら生きていく。しかし、本土からも見捨てられ米国の支配下にあつて、彼らは次第にやり場のない怒りを募らせ、ある事件をきっかけに、その感情が爆発する。闘争の中で、彼らは瀬長亀次郎に出会う。やがて、オンが基地から持ち出した“何か”を巡り、米軍も動き出す。20年の時を経て、オンが手に入れた「予定外の戦果」の真相が明らかになる。

オンが持ち帰った「予定外の戦果」とは、米軍高官の子を身ごもった女性が基地内で出産し、森に捨てられた赤ん坊だった。この赤ん坊の存在は、米軍による人権侵害や性暴力の象徴であり、占領下の沖縄で隠蔽されていた現実を体現している。つまり、オンが握った「秘密」は、米軍が沖縄に遺した傷と、それに抗う人々の尊厳だったのだ。

日本の中でも、戦中・戦後一番悲惨であったのは沖縄であろう。それ故、沖縄を舞台した作品には、琴線に触れるものが多い。

沖縄へのそんな政策を支えたのが自民党であった。2025 年 7 月 20 日の参議院選挙で国民はどんな審判を下すのか。

瀬長亀次郎は、沖縄の祖国復帰運動を象徴する政治家であり、米軍統治下の沖縄で民衆の声を代弁し続けた人物である。彼の活動は、沖縄返還の歴史と深く結びついている。

若い頃から社会主義運動に関わり、治安維持法違反で投獄された経験を持つ。沖縄人民党を結成し、反米・祖国復帰を掲げた。1950 年代に立法院議員や那覇市長を務めるが、反米姿勢により米軍から強い圧力を受ける。1957 年、米軍は彼の過去の投獄歴を理由に被選挙権を剥奪する布令を発令（「瀬長布令」）。米軍による資金凍結に対し、市民が自主的に納税し市政を支えたという逸話が残る。1970 年、沖縄初の国政選挙で衆議院議員に当選。以後 7 期連続で当選。1971 年、佐藤栄作首相に対し「基地の維持が目的であり、県民の願いに反する」と国会で激しく追及した。「この沖縄の大地は、再び戦場となることを拒否する！」という叫びは今も語り継がれている。

『米軍が最も恐れた男 カメジロー』など、彼の生涯を描いたドキュメンタリーも制作されている。